

Title	社会主義と結核ーソビエト・ロシアの身体的構築
Author(s)	後藤, 正憲
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44177">https://hdl.handle.net/11094/44177</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	後藤正憲
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 17483 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	社会主義と結核——ソビエト・ロシアの身体的構築
論文審査委員	(主査) 教授 中川 敏 (副査) 教授 小泉 潤二 教授 春日 直樹 助教授 栗本 英世

#### 論文内容の要旨

本論文は、ソ連における結核対策を題材にとりながら、医療政策とその実践が身体に関する認識との間に持つ関係について、考察をまとめたものである。帝政時代に始まり、社会主義体制の敷かれるソ連時代を通じてロシアで行われた結核対策の取り組みは、人間の身体に関する認識と深い関わりを持っている。

革命以前のロシアでは、結核は「民衆の病気」として、社会的に底辺にある人々のかかりやすい病気とされていた。当時ロシアでは、個人の身体を社会と不可分のものとする認識に基づいて医療が行われており、結核に関して社会的要因を重視する見方は、この身体観に沿うものだった。対策においては、結核の社会的要因を排除して環境を改善する努力がなされた。社会的な環境を改善して病気の発病を防ごうとする志向は、しばしば革命の動向と重なった。

革命後、ソ連政府は大幅な医療の組織改革を行うが、結核対策を行う上では革命以前に用いられていた手段をほぼそのままの形で継承している。結核は「社会の病気」とされるようになり、やはり社会的な環境を改善することに対策の基盤が置かれた。革命の前後で結核対策のあり方に共通性が見られるのも、個人の身体を社会と不可分のものとする認識が保たれたため、革命を通じて維持された身体観が、当時の対策のあり方を方向づけていた。

ソ連政府は医療政策を行う上で、科学的な知識を基盤に置いていた。科学的な知識に基づいて個人の生理的な身体に焦点を当てた治療が行われることによって、徐々に従来の身体観が解体されていく。特に 1920 年代の末頃から、結核対策においては社会環境を改善することよりも、むしろ患者の身体に現れる徴候を診断して、早期に治療することが要求されるようになる。結核対策を始めとする医療行為が行われる中で、個人の身体を社会と不可分のものとする従来の認識が徐々に揺らいでいった。

一方で、個人と社会の結びつきを論理的に回復しようとする議論が盛んに行われた。個人と社会を結びつけるものとして道徳的な感情に訴える議論や、また科学的な知識に基づいて個人の生理的な機能が社会と強い結びつきを持つとする議論である。こうした議論は、医療において個人の身体が社会から分断されることに対して、強い反応を示すものだった。

以上のような結核対策の変遷をたどり、医療に関して行われた議論と比較することによって、次のことが導き出される。人間の身体に関する認識と、結核対策を始めとする医療の行為は、互いに作用を及ぼし合っており、両者の間は相互的な関係で結ばれている。特定の政治的権力が医療のあり方を左右すると捉えるよりも、身体認識と実践的な医療との緊張した相互関係から、特定社会における医療が成り立っていると捉えるべきである。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は緻密な文献調査により、革命前から 1920 年代後期までのソビエト・ロシアの医療政策・実践が身体に関する認識に対してもつ関係について（とくに結核という病気に焦点を当てて）考察したものである。ソビエト・ロシアの医療史の研究はいくつか存在するが、医療人類学の知見に基づいた後藤君の研究は独創的なものである。

革命という政治的な大変革が医療実践そして身体観にそれほど大きな変革をもたらしたわけではなく、帝政期のゼムストヴォ医療の強調する社会と身体との密接な結びつきは、革命後もソビエト医療において継続されたと著者は主張する。大きな変革は 1920 年代の後半に起こる。病は身体の上に見える形でプロットされ、治療は社会とは切り離された身体の上に施されるのである。著者は、この二つの異なった身体観を支えるために、ともにパブロフの理論が（もちろんあい異なった形で）援用されていくさまを描写する。さらに、1920 年代後半以降では、医療政策・実践における「社会と切り離された身体」観を補うかのような「道徳的な」言説が生み出される。最終章において著者は、結核の等級付けと、それに対応する労働の対応付けについて考察し、帝政期とは違った意味において、身体と社会とが統合されるさまを分析している。

以上、当論文は、議論の妥当性、資料の適切な使用、そして理論的な独創性において、博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。